

猛勉強の青年期

15才になった空海は、桓武天皇の皇子である伊予親王の侍講（家庭教師）を務めた伯父の阿刀大足（あのおおたり）の勧めもあり、学問のため上京し、その下で勉学に励む。

確かに、都にいる伯父阿刀大足の下であれば、父母の下、地元にいるよりも、さらに質の高い学問に触れる事が出来たであろう。しかし、空海にしてみれば早く親元を離れたかったという事もあったのではないか。その後の空海の行動を見ていても、親の庇護下にあって安穩と暮らすより、独立独歩で進んでいく道を選ぶ気質がしばしば感じられる。『三教指帰卷上』によると、

わたくし空海は、18才で遊学した大学では螢雪の功でも足らぬほど刻苦勉励しました。

とある。18才になり、そのまま大学に進むが、その並外れた向学心は留まるどころを知らないといった勢いだ。

小さいときから貴物と呼ばれ、神童の誉れ高かった空海だが、「十で神童十五で才子 二十過ぎれば只の人」とならなかったのは、天賦の才に加えて、努力の才も人並みはずれていたことによるのだが、これが空海を空海たらしめた、ひとつのゆえんなのだろう。